

シノドスへの歩み みことばと共に 2021年10月31日 年間第三十一主日B年

小西広志

2021年10月31日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当の小西広志神父です。今日は10月31日は年間第三十一主日ですが、今日の朗読の箇所をシノドスの教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう

「聞け」

今日の第一朗読でモーセは神さまのことばを伝えます。「あなたはよく聞いて、忠実に言いなさい」(3節)、そして「聞け、イスラエルよ」。この「聞け」という神さまからの命令に心を留めたいです。「聞け」と命じることができるのは神さまだけだからです。

信仰は聞くことから始まる

神さまが聞きなさいと命じます。その呼びかけに応えるためには、神さまの語ることばに耳を傾けなければなりません。「信仰は聞くことにより始まる」と言ったのは使徒パウロですが(ロマ10章17節)、心をまっさらにして、心を傾けて神さまが語ることばに耳を傾けることから信仰の歩みは始まるのです。

キリスト者は互いに聴き合う

神さまが「聞け」と命じるのですから、人間は素直に神のことばに耳を傾けます。そして、聞くことから信仰の恵みをいただいたキリスト者は教会の中で互いに聴き合います。今月、10月17日、シノドス(世界代表司教会議)第16回通常総会の開会のミサでも、教皇さまは「出会う」、「耳を傾ける」、「識別する」を大切にしようと呼びかけています。また、先週、25日にはバチカンを訪れたルター派の教会の巡礼団に祝福を送りながら、「神が皆さんの生活の中に作曲したメロディーにも耳と心を傾けてください」と呼びかけました。この点で、わたしたち日本の教会は足りないような気がします。教会は神に耳を傾ける場所です。そして教会に集う者同士は互いに相手のことばに耳を傾け、真剣に聴き合うのです。教会の役務者であれ、奉献生活者、つまり修道者であれ、はたまた一般信徒であれ、どうも誰もが声高に叫ぶことばかり、自分の主張を貫くことばかりをしているように見えるのはわたしだけなのでしょうか?聞く。それも互いに聴き合うことなしには信仰は成熟しないと思います。

律法学者

福音朗読の方に移りましょう。「彼らの議論を聞いていた一人の律法学者が進み出」(マコ 12 章 28 b 節)とあります。また、「律法学者はイエスに言った」(32 節)とあります。「律法学者」ということばに注目しましょう。

律法を解釈する

律法学者はギリシア語でグラムマテウスと言いますが、書くを意味するグラフォーに由来する単語なのかもしれません。ですので、本来の意味は書記官です。しかし、新約聖書では多くの場合、ユダヤ教の律法学者を指しています。律法学者やファリサイ派はなんだか親の仇のような印象があります。彼らは「ラビ」と呼ばれて皆から尊敬され、社会的に地位の高い存在でした。実はイエスさまも「ラビ」と呼ばれていますから律法学者、律法の専門家だったのでしょうか。律法学者は律法を研究し、その解釈を教えます。そして何よりも人々の日常の振る舞いが律法にかなっているかどうかを判断しました。ですので、律法学者は聖書の専門家であり(マタ 2 章 4 節参照)、同時に私設裁判官のような存在でもありました(マコ 7 章 1 節参照)。この律法学者が律法、神のことばを解釈する者だったという点が重要です。

律法学者の答え

最初にイエスさまに質問して、イエスさまの答えを聞いた律法学者が「先生、おっしゃるとおりです」と賛同します。そしてイエスさまの答えを繰り返しますが、よく読むとイエスさまの答えとは違うことに気づかされます。イエスさまは「第一の掟は、これである」(マコ 12 章 29 節)、「第二の掟は、これである」(31 節)と二つに分けて説明しますが、律法学者は神さまへの愛と隣人への愛を一つにまとめています(33 節参照)。そしてそれがどんな犠牲(いけにえ)よりも優れていると語っています。そして、この律法学者はイエスさまがおっしゃった「唯一の神」(申 6 章 4 節参照)に加えて「ほかに神はない」(申 4 章 35 節参照)を付け加えています。さらにそのことを第一の掟から独立させています(マコ 12 章 32 節参照)。ちょっと聖書の箇所を読んでみましょう。

32 律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。『神は唯一である。ほかに神はない』とおっしゃったのは、本当です。

33 そして、『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして神を愛し、また隣人を自分のように愛する』ということは、どんな焼き尽くす献げ物やいけにえよりも優れています。』

律法学者の解釈

つまり、この律法学者はイエスさまの答えを受けて、それを解釈して神への愛と隣人への愛という二つの掟を結び合わせています。さらには神さまの唯一性を強調しています。律法学者の務めは律法を研究し、それを解釈することになりましたので、まさに自分の務めを果たしたことになるのです。二つの愛を結び合わせることで愛の重要性を強調しましたし、さらには神は唯一であるという解釈を加えて、神の支配がおよばないところは無いとしたのです。

解釈する

これがシノドスの教会とどう関係するかというと、大いにあるのです。第二バチカン公会議が示した教えの中で大切なものの一つに教会が現代世界の中であって世界を解釈してよいというものがあります。さらには、教会の中であって信者は聖書の言葉を解釈してもよいというものがあります。これは第二次世界大戦後あたりから生まれていった思想的な流れに対応したものです。それは、人はそれぞれが生きている現状、状況の中で物事を解釈して生きていく存在だという思想です。その解釈はどれもが尊いのです。ですから、神のみことばは、その信者が生きている現状や状況の中で理解され、解釈されていくのです。同じように教会は、この世を信仰の視点から理解し解釈できるのです。

おかれている状況の中で神のことばを理解し、解釈していけるのは、信者の中に聖霊が働いているからです。この世界を教会が批判せずに理解し、解釈できるのは、この世界に聖霊が働いていると信じているからです。そして、教会がより正しく社会と世界を理解し、解釈できるようにと父なる神さまは教会に聖霊を送ってくださっているのだと堅く信じているからです。

状況の中で解釈する営み

さて、福音朗読に登場する律法学者は、イエスさまのことばを適切に解釈しました。同じように教会と、わたしたち信者の一人ひとりも、わたしたちが生きている現状や状況に応じてイエスさまのことばと行いを理解し、解釈してよいのです。しかし、独りよがりの解釈ではダメです。信仰の共同体の中で共に解釈しなければなりません。状況の中で神のみことばを解釈する営みは1970年代になっていわゆる解放の神学のもとで発展しました。もちろん行き過ぎもありました。それに対して教会の教導職がブレーキをかけることもありました。時間がありませんから、その点については深く触れませんが、この半世紀、伝統的な聖書の読み方と状況に応じて解釈する聖書の読み方との間を拮抗のようなものがあつたのも確かです。また、広くキリスト教界全体を見わたしてみると、原理主義的な聖書の読み方を推奨する教派もあれば、自分たちの都合のよい聖書の理解をしようとする教派もあります。

聖霊の働き

今の教皇さまは南米で貧しく、苦しみながら生きる人々と共に生きてきました。そのため、人がおかれた状況の中で聖書を読み、味わい、解釈することを望んでおられるのかなと思います。しかし、その場合、どうしようもない現状や状況の中にも神さまが働かれていることに気がつき、認めるといえば信仰のセンスが必要となります。シノドス的な教会とは、教会に集う一人ひとりに聖霊が働き、社会の中にも聖霊が働き、神の導きの中にあることを認める、認め合う共同体なのです。

「聞く」ことを大切に

「聞け」という神さまからの呼びかけは、今日もわたしたち一人ひとりに響きます。厳しい現状の中にあっても神さまからのことばに耳を傾けることが求められます。さらには、神さまのことばに従って、神さまのことばに則して人生や社会や世間を受けとめ、理解し、解釈するような信者であることが求められているのです。

それでは、また来週。